

## 試験研究（中間）評価整理表

試験研究機関名 林業研究センター  
所管グループ 研究開発グループ

整理番号	施策目標等		試験・研究課題名	研究目的	研究概要	試験研究始期・終期		評価結果	理由	外部評価アドバイザー意見
	施策目標	研究課題分類				始期	終期			
1	21世紀の豊かな森林、活力ある林業・木材産業づくり	本県に適した高品質で優良品種の開発と家畜の改良	食品機能性の高いナメコの品種の育種	食品機能性強化を目標とした育種母材の選抜、育種を行い、従来品と差別化された競争力の高い新品種を開発する。	県有ナメコ菌株の食品機能性について調査した結果、食物繊維量、ペクチン様物質の含有量が多く、原木用品種の母材となりうる菌株をみつけた。今後は、これらについて栽培法（条件）の違いによる有効成分の検討を行う。	16	20	C	今後の育種については、栽培方法の検討も併せて行うため、別課題「ナメコ有効成分を増強する栽培技術」と統合して行うことが妥当である。	有効成分の新たな期待の可能性はあまりないとのことでありますが、全国有数の生産県であることを考え、有効成分を多く含むナメコの開発に期待します。また、消費者に、ナメコの持つ有効成分について十分伝わるような販路やアピール等も必要かと思われます。
2	21世紀の豊かな森林、活力ある林業・木材産業づくり	本県に適した高品質で優良品種の開発と家畜の改良	野生きのこ優良品種選抜	野生きのこの菌株を採取し、それらの交配・選抜等により、優良な子実体を形成する優良株を作出する。	ムキタケ48、ブナハリタケ18菌株を収集、原木栽培において良好な各3系統を選抜した。今後も当センター保管のタモギタケ、マスタケを含め、栽培試験を継続して行う。	15	19	B	浸水発生等栽培方法の検討とそれらに適した系統の選抜が必要であることから、継続した研究が必要である。	収集した数の多さに比例して、優良なものが得られる可能性が高まることから、継続した研究の必要性は妥当な判断。
3	21世紀の豊かな森林、活力ある林業・木材産業づくり	県土の多目的機能発現のための森林環境管理技術の開発	伐採適齢人工林の混交林化	伐採適齢期を迎えたスギ等の人工林の伐採後に、再造林木の植栽をしないで、かつ、森林荒廃を起ささない、低コストな森林の更新技術を開発し、水士保全に適した針広混交林に誘導する手法を確立する。	県内各地域計15箇所の試験地を設定し（設定中2箇所）、林況調査を行っている。その結果、高木性広葉樹等の出現が確認された。今後も伐採率の違いを含めて、高木性広葉樹等の混入（出現）を調査し、針広混交林化を図る手法を検討する。	16	25	B	概ね計画どおりのデータが蓄積されつつあり、継続した調査が必要である。	施業転換更新技術が明示され、各地に対する評価が得られることになるのでしょうか？
4	21世紀の豊かな森林、活力ある林業・木材産業づくり	県土の多目的機能発現のための森林環境管理技術の開発	植生抑制のための炭材を利用した吹き付け方法の検討	林道法面下部の植生抑制手法を開発し、道路の安全通行の確保と維持管理費の縮減を図る。なお、吹き付け資材としては、現場で植生抑制効果が認められている事例のある木炭を用いて環境へ配慮する。	既施工地及び新規施工地での、吹付け材への炭材混入割合、混入資材、吹付け厚等による植生抑制効果を継続して検討する。	17	21	C	新たな施工地はないため、期間を短縮し、既施工地での効果調査及び一般的な粉炭による植生への影響調査にとどめ、課題「木本類による法面緑化」と統合するべきである。	工法自体が否定された訳ではないのだろうが、やむを得ない対応と認む。
5	21世紀の豊かな森林、活力ある林業・木材産業づくり	循環型社会を形成するための木質資源等の利用技術開発	木質バイオマス循環利用モデルの開発	・本県の木質バイオマス賦存量の把握と供給利用モデルの開発を行う。 ・マルチング厚と雑草抑制効果を明らかにする。	・県内の木質バイオマスの賦存量の把握を行い、いわき市における利用モデルを作成した。 ・林内にチップを敷き込み雑草抑制効果を調査検討している。	15	19	C	マルチング厚と雑草抑制効果の関係は概ね明らかになったが、木質バイオマスの供給利用モデルについては、汎用性のあるモデル開発の作成が困難であることから、いわき市を例とした供給利用モデルの作成にとどめ、期間を短縮すべきである。	意義の大きい研究で、来年度も継続実施すべきであると考えられるが、期間短縮はやむを得ないと考える。なお、今後は、利用の方途を十分に意識した関連研究との連携等が考えられる。
6	21世紀の豊かな森林、活力ある林業・木材産業づくり	農林水産物の高品質化と一層の省力・低コスト生産のための技術開発	ホンシメジ人工栽培の実用化試験	「菌根性きのこの安定生産技術の開発」により人工栽培が可能となったホンシメジ栽培の実用化を目指す。	・菌株の選抜では13菌株を収集し、2菌株から子実体の発生をみている。野外埋込では、害菌に汚染されているい培地を開発し、子実体原基が形成されていることを確認した。今後も培地の開発と子実体の発生方法について検討する。	16	20	B	野外埋込栽培で原基の形成が確認されるとともに、人工環境下では、収集菌株の2割に子実体形成が認められたため、継続して実施すべきである。	産地間競争に対して、対処法は研究資源を投入することが有効。有望な研究課題であると判断する。